

伊賀市住民自治のあり方検討委員会 議事概要

審議会名	第7回伊賀市住民自治のあり方検討委員会
日時	令和8年6月29日（月） 午前9時30分～11時30分
場所	伊賀市役所 庁議室
出席者	【委員】小林 慶太郎委員長、板井 正斉委員、中西 正敏委員、 南出 幸子委員、山口 真由子委員 【伊賀市】地域連携部 百田 貴子部長、奥田 泰也次長 地域政策課 福田 雄高課長、奥沢 浩和主幹、吉藤 彰
傍聴人	なし
内容	以下のとおり

1 開会

<委員長あいさつ>

これまで議論を重ねる中で整理しきれていない点もあるが、答申の見通しを立てる段階に来ている。本日も意見をいただき、今後の伊賀市の住民自治を形づくる議論としたい。

2 議事

（1）第6回の振り返り【資料1・2】

（委員長）

前回の議論内容の振り返りについて、事務局から説明を。

（事務局）

議事概要に対する修正意見等も踏まえ、資料1・2として意見を整理した。資料2では、項目ごとに意見を割り振り、修正箇所を赤字で示している。特に「課題」「期待される変化（変革の方向性）」に関する議論を中心に整理した。

（委員長）

内容に相違等がないか。

<意見なし>

(2) 答申案（報告書案）について【資料3】

（委員長）

これまでの議論が報告書案に適切に反映されているか、全体のバランスも含め確認したい。

（事務局）

報告書案は、最終的に答申（別紙）を付し、報告書として添付する整理を想定している。冒頭に概要、諮問内容、検証方法を掲載し、その後に検証結果として5つの論点等を整理した。7頁以降は、論点ごとに見開き2頁で「現状の成果と問題」「めざす姿」「課題」「変革の方向性」を整理している。17～18頁に「行政等による支援」、19～20頁に「まとめ」を掲載している。

（委員長）

従前の様式（下から上に読む構成）は読み取りづらいことから、現状から整理する構成に変更した。特に、左頁の「問題」の要約、右頁の「変革の方向性」は提言の肝となるため、重点的に意見を求めたい。

（事務局）

2頁、4頁等に第8回の開催を想定した表現が一部含まれているため、最終的に開催の有無に応じて修正する。

（委員長）

諮問では7月頃の答申が希望されているため取りまとめ時期にある。必要があれば第8回の開催もあり得る。前段の記載については、後段の議論も踏まえ、必要に応じて修正する。

① 1～18頁の確認

（委員）

11頁、③住民参加・参画の成果欄に「防災事業等を通して外国人住民が地域活動に参加できている地域がある」とあるが、実態として多くないため「一部地域」等の表現がよい。

加えて、外国人住民に関する相談がある際、地域側が対応方法に困っていることや、受け入れ方がわからないということがあるので、問題点として整理すべき。

また、自治協の『役割や理念』の認知度が低いとあるが、そもそも存在自体を知らない住民が多数いるため、その点も問題として認識すべき。

あわせて、高齢化率が非常に高い地域もあり、これまで自治協が高齢者支援の事業を行っているので、高齢者に関する取組も成果として整理できるものがあれば反映してはどうか。

一方で高齢者向けに偏り、子育て世代・若者世代へのアプローチが弱い点も課題になり得る。

(委員長)

外国人住民に限らず、若者等も含め多様な住民の参画が十分でない点は、問題点として整理することで、変革の方向性（参加のハードルを下げる、多様な住民が参加できる工夫）との整合が高まる。自治協の認知に関する指摘は、論点2（組織運営）とも関連するため表現を検討する。

(委員)

②組織運営において、「外部団体が自治協と連携する際、協力体制に差がある」という記載は、外部団体側の差と誤解され得るため、地域（自治協）側の体制差であることが分かる表現に修正してほしい。

また、「(幸せな縮小)」という表現は「縮小すべき」という印象を与える可能性がある。一方、まだ参加・参画していない層が多数いるという地域があり、負担軽減は縮小だけでなく、参画者が増えることで実現する面もあるため、あくまで縮小は選択肢の一つと分かる書き方がよい。

(事務局)

「幸せな縮小」は、変革の方向性として断定的に見えないよう整理する。組織の棚卸しの結果として、縮小も含めた再設計を選択肢の一つとして位置づけるなど表現を調整する。

(委員)

自治協の聴き取りでもあったように、担い手育成ができていない点が地域の重要課題であり、②組織運営の課題欄の「新たな参画機会、動機付けの創出」に「担い手確保・育成」の趣旨が含まれることが読み取りやすいよう、表現を補うとよい。

(委員長)

次世代の参画促進等の趣旨がより明確になるよう、文言の補正を検討する。

(委員)

伊賀市は福祉分野において「高参加・高福祉」の理念で取り組んできた経緯がある。まちづくりにおいても参画を増やす方向性を諦めるべきではない。他方で、参画を増やすばかりでは限界を迎える可能性もある。その点において、「幸せな縮小」の考え方は地域に安心感を与える面もあるため、両方の整理の仕方が重要である。

（委員長）

地域差が大きいことを踏まえ、一律の姿を求めるのではなく、地域の実情に応じた柔軟な運営ができること（地域差の許容）を両論併記してもよい。

（委員）

変革の方向性の4つ目、最低限の合理的機能と地域で上乗せする方針を整理する趣旨とも関連するため、読み取りやすい整理を検討する。

（委員）

オンライン等の活用を進めることを求めるなら、申込方法や二次元コード作成等の基本的なスキルも含め、具体的な時代のニーズに応じた行政から学びの機会（講座等）の支援があるとよい。

（委員長）

I T等の活用に向けたスキルアップ支援の観点で整理を検討する。

（委員）

「伴走支援の推進」は、自治協側の期待にもつながるため、答申として強い表現で示すことも検討してはどうか。例えば「伴走支援の”強力な”推進」など。

（委員長）

行政として受け止め可能で、かつ後押しとなる表現は積極的に盛り込む方向で検討する。

（委員）

問題点として「地域福祉コーディネーターだけではマンパワーが足りない」とあると、個人の力量不足のように読める懸念がある。行政側の制度・体制としての課題（支援の仕組み全体）も合わせて整理した方がよい。

（事務局）

議事録から抽出した文言が前後の文脈を欠き、意図が伝わりにくい箇所があるため、支援体制全体の課題として伝わる表現に見直す。

（委員長）

切り取られた表現により文脈が分かりにくくなる箇所は、報告書案として読み通した際に誤解が生じないように調整してほしい。

(委員)

地域福祉コーディネーター”制度”と入れると良いのでは。また、成果では地域担当職員も併記しているので、問題点でも併記しては。

(委員長)

報告書に直接反映するかは別としても、文言の背景にある意図は議事録に残るため、細かな点でも発言してほしい。

(委員)

12 頁の変革の方向性（上から 2 つ目）の文章が分かりにくい。アンケート等で集めた声が「何にどう反映されたか」とあるが、「地域の取り組みに反映された」などに修正するなど、趣旨を明確にしてほしい。

また抽象的なまちづくりより「具体的な切り口」とあるが、わかりにくいので「取組・事業」を通じた発信のように表現を具体化した方がよい。

「やさしい日本語やオンライン等」は端折りすぎているため、「やさしい日本語の使用・活用」や「オンラインの活用」など表現を整えたい。

あわせて 11 頁の「コロナ禍による社会の衰退により住民交流の機会が減っている」は、地域差があるのではないか。

(委員長)

・「声の反映の見える化」は、回答すれば取組に反映されるという期待感につながり、参加意欲を高める意図である。文意が伝わるよう修正する。

・発信については「具体的な切り口」という表現がわかりにくいので「子育て」「防災」等、生活に近い取り組み等で発信する旨の表現に改める。

・「やさしい日本語」「オンライン」は、「使用・活用」等を明記し、参加のハードルを下げる趣旨を分かりやすくする。

・コロナ禍の影響は一律ではないため、「減っている地域がある」等、地域差が分かる表現に修正する。

(委員長)

13 頁、問題点として、活動資金に関して地域差が大きいと思われる。交付金の使途に困る地域がある一方、交付金の一定割合を区等に配分しつつ、町内会費が高額な地域もある。現行の交付金が人口割中心で、地域の実情に必ずしも合っていない可能性がある。

(委員長)

財政支援メニューが縦割りで、地域が活用できる補助メニューを包括的に紹介できてい

ないのではないか。横串で整理し、地域に関係する支援メニューを分かる形で示す中間支援的な機能が必要である。

また、農山村部等では面積・維持管理（道路・水路等）に係る負担が大きく、町場との条件差もあるため、人口割だけでなく面積割等も含めた配分の検討余地がある。

②まとめ（１９～２０頁）の確認

（委員長）

報告書は途中を飛ばしてまとめだけ読まれることも多いため、１９～２０頁は重要である。意見を求める。

（委員）

１９頁の「主なものは次のとおりです」といった書き方だと、どこまで抜き出しているのか分かりにくい。前頁までの記載の単なるトレースではなく、横断的に整理した旨が伝わる表現がよい。「横串を刺して全体像をまとめると次のとおりです」などはどうか。

（委員長）

あわせて、２０頁、変革の方向性４つめに多様な参画の趣旨をまとめでより明確に打ち出せるとよい。「～ハードルを下げた発信に取り組み、新たな層への参加・参画を促す」など。

（委員長）

「課題として考えられた点について改めて以下のように整理する」など、横断的整理であることが伝わる文言に修正する。発信の項目にも「これまで参加・参画が多くなかった人々も含めた多様な参加・参画を促す」趣旨を加えることを検討する。

（委員）

１９～２０頁の強調表示（二重括弧等）の使い方に統一感が欲しい。市民に分かりやすい強調の仕方（太字、囲み等）も検討してはどうか。

（事務局）

ここは「①～⑥のどの部分をまとめているか」を示す意図であるため、二重括弧に限らず、太字・囲み等、別の表現も含め委員長と調整する。

（委員長）

２０頁の変革の方向性（２つ目）は「何をやるか（事業内容）」と「どうやるか（手法）」が混在して分かりにくい。切り分けて整理した方がよい。

(委員)

まとめの構成として、目指す姿を先に示して差を埋める議論につなぐ意図は理解できる。一方で「当初から想定されているめざす姿を引き続き目指す」とだけ書くと、取組が不十分だった印象にも読める。これまでの取り組みは評価しつつ、「社会情勢や状況変化により当初想定していた方向性だけでは達成しづらくなっている」等の旨を加えるとよい。

(事務局)

「社会情勢の変化等により目指す姿の達成が難しく、現状として差が残っている」旨を、「差を埋めるための検討」の導入に追記する方向で整理する。

(委員長)

目指す姿になぜ到達しきれていないかという理由が分かるよう、差の背景説明を入れた上で、差を埋めるための課題・方向性につなげるとよい。

③答申書（別紙）の扱い

(委員)

報告書は整理されている。報告書の鑑文として付く答申書に、市長からの諮問に対しての答申として、留意事項やお願い等を付すことは可能か。

(事務局)

基本は「報告書のとおり答申」とする想定である。留意事項等を添える場合は答申書に記載することは可能である。

(委員)

今回の委員会において、住民自治協議会が住民に十分認知されていないということが大きな問題としてクローズアップされた。報告書をまとめて終わりではなく、報告書を市民等へ周知していくことや、活用の工夫を促す趣旨を答申書に盛り込めるとよい。

(委員長)

答申書において、報告書の活用、住民自治の意義の理解促進、周知等に留意する旨を付記する方向で検討する。答申の文言の後に「なお、この報告書を活用いただき、伊賀市の住民自治の更なる向上を図っていただくとともに、市民の皆様にも住民自治の意義等について十分ご理解いただけるよう今後取り組んでいただくようよろしくお願いいたします」という趣旨を加えることとする。

(3) 審議の進め方（最終確認方法）

（委員長）

本日意見を踏まえ事務局で修正するが、再度会議を開くか、メール確認のうえ委員長一任とするか意見を求める。

（各委員）

委員長一任とし、修正案はメールで確認する形でよい。

（委員長）

本日の意見を踏まえ事務局と調整し最終案を作成する。最終案はメールで委員に確認いただき、委員長一任で成案とする。

3 その他

（委員長）

その他、意見はないか。

<意見なし>

4 次回開催日について

（委員長）

委員長に修正は一任されたので、次回の開催は予定しない。

（事務局）

今回で委員が一堂に会する最終回となる。今後は、成案確定後に委員長から市長へ答申を行うため、日程調整のうえ委員へ連絡する。可能であれば委員の同席もお願いしたい。

5 閉会

<閉会あいさつ>

（委員長）

これまで7回にわたり、委員長として進行を務めた。拙い進行で迷惑をかけた点もあったと思うが、進行面でも協力をいただき、それぞれの立場から多くの意見を出してもらえたことに感謝する。結果として、この1年、濃い議論を重ねることができたと感じている。

一方で、本日が最終回という位置づけでありながら、委員長としての宿題はまだ残っている。本日出た意見を踏まえ、報告書案をどう直せばより伝わる形になるのか、事務局と調整し、最終案を作成する。そのうえで、委員には「これで大丈夫か」という最終確認をお願いしたいので、もうしばらくお付き合いいただきたい。

市長への答申日程については、市長の都合もあるため事務局で調整してもらうことになるが、可能であれば委員にも同席いただき、一言でも感想や思いを伝えてもらえる場にした。日程が確定したら都合がつく範囲で協力いただきたい。

委員が全体として一堂に会するのは本日が最後となる。これまでの協力を改めて御礼を申し上げる。ありがとうございました。

(地域連携部長)

1年間、本当にありがとうございました。本日が皆さまにお揃いいただく最後の機会となるため、一言お礼を申し上げる。昨年7月、住民自治のあり方検討ということで、全国的にも例の少ない委員会の委員をお願いしたところ、多忙の中にもかかわらず快く引き受けてもらい、今日まで7回にわたり、熱心で密度の濃い議論を重ねてもらった。

その間、それぞれの立場から、行政側では気づきにくい、はっとする視点の意見を数多く頂戴した。地域ごとの課題が顕在化する中でも、示唆に富む提案をいただき、事務局としても大変勉強になった1年だった。

今後は、報告書・答申に込めてもらった思いを行政としてしっかり受け止め、決して無駄にすることなく、地域政策課の職員をはじめ、支所長を中心に庁内が連携し、地域としっかり向き合いながら取り組んでいく。

この答申はゴールではなくスタートだと考えている。今後も力添えをお願いすることがあると思うが、引き続きよろしく願いしたい。

最後に、委員の皆さまのますますの活躍を祈念し、御礼のあいさつとする。長時間にわたり、本当にありがとうございました。